

研究課題	自己の特性を 360° カメラの動画で振り返る活動を通して「社会的に共有された調整」が図れる生徒の育成
副題	～ICT 機器の活用で実現！思考の「聴こえる化」によるメタ認知で自己理解を促すキャリアパスポート～
キーワード	360° 動画、メタ認知、エージェンシー、社会的に共有された学習の調整、キャリアパスポート
学校/団体名	公立富岡市立富岡中学校
所在地	〒370-2343 群馬県富岡市七日市 1116-1
ホームページ	http://tomioka-jhs.nc.tomioka.ed.jp/

1. 研究の背景

OECD は近年、今後の世界を担う子供たちに必要な能力として「生徒エージェンシー」という概念を打ち出した。生徒エージェンシーとは、「変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」のことである(秋田ら, 2020a, p.3)。この概念の根底には、生徒は自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与えうる能力と意思を持っているという考えがある。エージェンシーは訳すと「主体性」という言葉になるが、生徒エージェンシーは主体性以上の内容を含んでいる。主体性とくくと、何となく耳あたりがよく、よいイメージをもつ人は多いと思う。しかし例えば、自分のやりたいことを決めて、周りのことを考えずに突き進むことも主体性と言えれば主体性である。そこでこういったものを除いて、より広い視野をもった主体性のことをエージェンシーと呼ぶ。正確な定義は先に述べたとおりであるが、生徒エージェンシーが目指す方向性は、自己だけでなく他者や社会の Well-being であり(秋田ら, 2020a)、社会の一員としての責任をもつことが大切になる(白井, 2020)。また、他者との関わりの中で育つという点が強調されている(白井, 2020)。そして、この生徒エージェンシーは、“Anticipation (見通し) - Action (行動) - Reflection (振り返り)” という AAR サイクルによって育まれる(白井, 2020)。AAR サイクルは3つのステージがあり、最初のステージは「Anticipation (見通し)」である。今から取ろうとしている行動がどのような帰結をもたらすか意識して、今関係している当事者の立場だったらどのように考えるかという他者視点も生かしつつ見通しをもつ。第二のステージは「Action (行動)」である。「見通し」の段階で十分に考えた上で、本来の目的に沿って、責任を伴う形で行動する。そして、第三のステージが「Reflection (振り返り)」である。自分自身や他者の行動を客観的に評価することで、将来の行動の改善につなげていく(白井, 2020)。こういったサイクルを回し続けることで、他者の視点をもった責任感の醸成につながると考える。

しかし、様々な論文を検索しても、まだまだエージェンシーを高めるための研究は道半ばであることがわかる。そして、他者の視点をもった責任感を醸成するための AAR サイクルは重要にも関わらず、その方法は現在確立されているとはいえない。さらに、現在行っているキャリアパスポートも、勤務校では課題がある。具体的には、例年行っている勤務校のキャリアパスポートは主に行事や学期の振り返りであるが、生徒の「記憶」をもとに書かせているものだった。その

ため、その場の雰囲気や空気感に左右された記述が見られたり、他人事のような記述も見られたりした。エージェンシーを高めるためのAARサイクルを回していく方法の一つとして、キャリアパスポートは絶好の機会である。しかしながら、そのキャリアパスポートへの取り組みせ方には課題がある。

2. 研究の目的

これらの背景から、本研究の目的を「生徒のメタ認知を促した上で自己を振り返らせることにより、社会的に共有された学習の調整を図ろうとする生徒を育成し、その見取りをキャリアパスポートによって行うこと」とする。最終的には、生徒のエージェンシーを高めていきたいが、その方法の確立を目指す。そのために「自己の特性を360°カメラの動画で振り返る活動」の実践を1つの提案できるようにする。これは、先に述べた生徒が「記憶」をもとに振り返っているのに対し、実際の自分たちの姿という「記録」をもとに振り返らせようという試みである。そうすることで、なんとなくの振り返りから脱却をし、より意味のある、価値のあるものにしていきたいと考えた。振り返る材料は「写真」も考えたが、ただ「見える化」されたものよりも動画による「聴こえる化」されたものを素材として振り返ることでより効果が上がるのではないかと考えた。この、360°カメラの撮影による動画をもとに自己をメタ的に振り返る学級活動が、キャリアパスポートに与える影響を検証していく。

3. 研究の経過

研究の経過は以下の表の通りである。

表：研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月17日	生徒エージェンシーの重要性、AARサイクルの大切さを周知する校内研修	
6月	360°動画で自分たちの姿を振り返る学級活動	ワークシート
6月19日	授業改善に関する校内研修「よりよい授業を創るには」	ワークシート（教師）
9月	360°動画で自分たちの姿を振り返って授業の在り方を考える学級活動	ワークシート
9月11日	キャリアパスポートについての校内研修「キャリアパスポートの小中連携の形」	
10月27日	授業公開と校内研修「生徒エージェンシーを高めるための支援について」	ワークシート（教師）
12月	授業観に関するアンケート「授業は誰のものだと思いますか？」	アンケート（生徒）
3月8日	キャリアパスポートの実施「1年間を振り返って」	ワークシート（生徒）

4. 代表的な実践

4.1 360° 動画で自分たちの姿を振り返る学級活動（6月）

この実践は、第1学年の全クラス（1組、2組）で筆者が授業者として行った学級活動である。準備として、この学級活動の前に行われた数学の授業を360°カメラで撮影した。そこから個別追究の時間約5分と全体共有の時間約10分の計15分程度を切り取って編集をし、YouTubeに限定公開でアップロードし、生徒が参加するGoogle Classroomに動画のURLを載せて見られるようにした。

当日はまず、導入として生徒たちに「授業は誰のものだと思いますか？」と問い掛け、その理由を含めて個人用のワークシートに記入してもらった。更に授業時間の中で大切だと思うことも問い掛け、これもワークシートに記入するよう促した。次に、生徒たちに「よい授業とは、自分にとっての学びがある『I視点』、近くの友達にとって学びがある『You視点』、クラス全体にとって学びがある『We視点』の3つにおいて学びがある授業であること」を伝え、動画をタブレットで視聴させた（図1）。

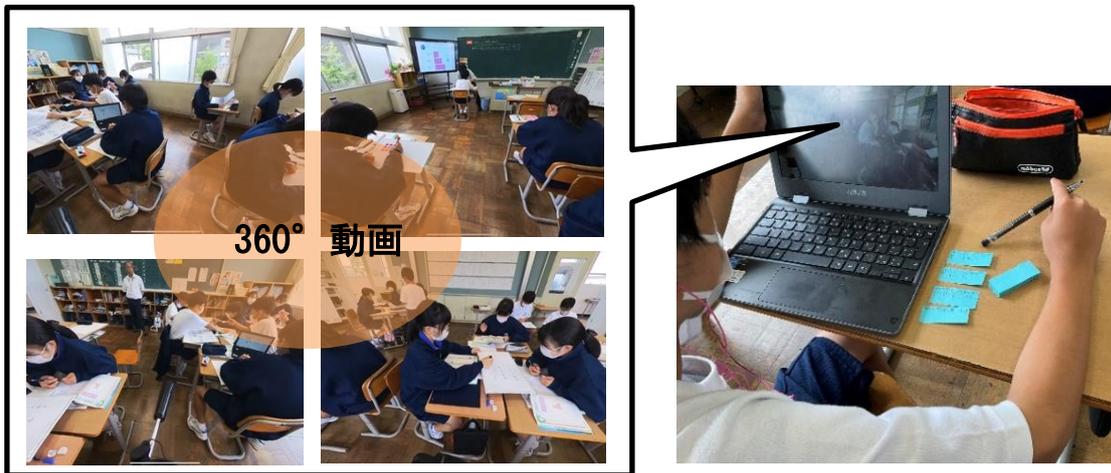


図1 自分たちの授業の様子を360°動画で見ている様子

その後、「I視点」「You視点」「We視点」の3つの視点から、「いいなと思う言動」と「改善した方がよいと思う言動」を一人一人考え、付箋紙に書き、その後4人グループで意見交流を行い、全他でも意見交流を行った（図2）。その際、図3のようなワークシートを用いた。



図2 意見交流をする様子



図3 学級活動で用いたグループ用のワークシート

この実践では、良い点として「集中して1人で取り組んでいる人がいた」や、「みんなのために発言や前で発表している人がいた」という意見が出た。改善点としては「先生と1対1の授業になっている」ことや「いつも決まった人としか交流していない」といった意見が出た。客観的に自分たちの姿を見たことで、たくさんの気づきがあったようである。

4.2 360° 動画で自分たちの姿を振り返って授業の在り方を考える学級活動（9月、10月）

9月26日に1年2組で、10月16日に1年1組で、360° 動画で自分たちの姿を振り返った上でこれからの授業の在り方を考える学級活動を行った。AAR サイクルを意識した授業設計にし、授業前半は4.1で示したような自分たちの数学の授業中の姿をメタ的に振り返る活動を取り入れ、授業後半ではクラスとしてどのような授業を創っていくのかを考えた。この授業で1年1組は、全員が授業に積極的に参加できるよう「数学班」という数学を学ぶためのグループ活動を中心にして学習を進めていくことを決めた。1年2組は、課題解決が出来た生徒が分からない生徒に教えにいくという取組の課題として、数名無駄な出歩きがあること、教えてくれる人によっては分かりにくい場合がある等の課題が出た。そこから、分かっている人が教えにいくのではなく、分からない人が分かっている人に聞きにいくというルールに変えることを決めた。また、「数学ペア」という生徒が決めた2人～4人組の学習を取り入れていくことを決めた。どちらのクラスも、自分たちの姿をふまえた新しい授業のスタイルを提案することができた。

5. 研究の成果

本研究では、「社会的な学習の調整」を図れる生徒の育成を目指したものであるため、社会的な学習の調整を支える視点を生徒がもつことができているかを生徒へのアンケートと、キャリアパスポートの記述から検証していく。

5.1 2022年度の1年生と2023年度の1年生の回答の比較（実施日：2022年11月23日、2023年12月15日）

2022年11月時点での1年生（現2年生）と2023年12月時点での現1年生の「授業は誰のものだと思いますか？」に対する回答の比較を行う。

現2年生が1年生だった時の回答の中で、「クラス全員」や「生徒と教師」のような他者の視点を含む回答をした生徒は全体の約64%であった。これに対して現1年生は88%であり、昨年度より24%高かった。また、現2年生の中には「先生」と回答している生徒も全体の12%いたが、現1年生の回答においては、そうした回答は皆無だった(図4)。

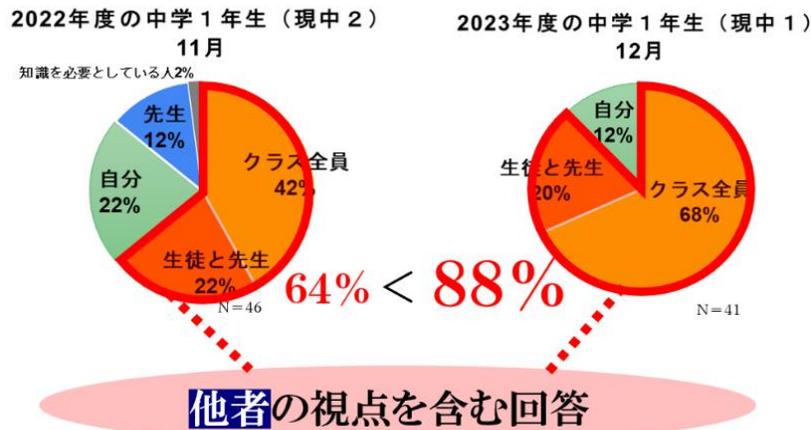


図4 「授業は誰のものだと思いますか」に対する回答の比較 (2022年の中学1年生、203年度の中学1年生)

5.2 2023年度の2年生、3年生の2022年度と2023年度の回答の比較 (実施日: 2022年11月23日、2023年12月15日)

2023年度の現2、3年生の授業観が1年経ってどう変化したかについても示す。「授業は誰のものだと思いますか」という問いに対し、現2年生は「クラス全員」や「生徒と先生」のような他者を含む回答が2022年度は64%であったのに対して、2023年度は86%であった。この1年間で22%の上昇が見られた(図5)。

現3年生は「クラス全員」や「生徒と先生」のような他者を含む回答が2022年度は63%であったのに対して、2023年度は71%であった。この1年間で8%の上昇が見られた(図)。その中でも「クラス全員」と回答した割合は37%から50%へと、13%の上昇が見られた。

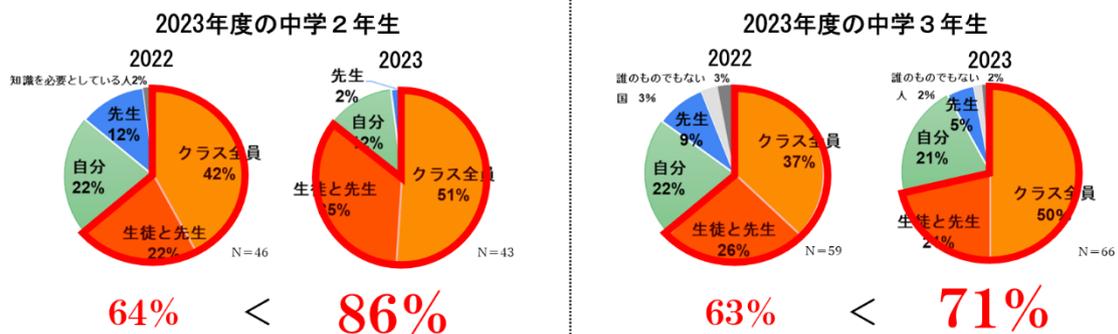


図5 「授業は誰のものだと思いますか」に対する回答の比較 (2023年の中学2、3年生、2022年と2023年)

5.3 キャリアパスポートへの記述より

1年生のキャリアパスポートの記述から、質的な成果の検証を行っていく。生徒Aの記述である。生徒Aは、特別支援学級在籍の生徒で、いくつかの教科を通常級で学習をしている。Aは、3月8日の1年間を振り返るキャリアパスポートで、「この1年間を振り返って、頑張ったこととその理由」として「人との関わり方を考えた」という記述をしている。6月と9月の360°動画を見た時には「俺、こんなに動いてるのだな！気付かなかった！」と最も反応した生徒である。担任も、生徒Aがこのような記述をしたことに驚いていた。担任によればAは、動画でメタ的に振り返る学級活動を行う以前には、周りや相手の気持ちを察することができず、他者との関わり方を考えすらしなかった生徒であった。その生徒が1年間をかけて頑張ったことに他者との関わり方を記述したのである。もしかすると、本研究の実践が影響を与えたのかもしれない。

5.4 成果のまとめ

5.1、5.2で示したように、全学年が授業観に「他者の視点」をもつようになったといえる。これは社会的に共有された学習の調整を図ろうとする大前提の心もちである。5.2では、特別な支援を要する生徒への効果が期待されるのではないかという成果が得られた。

6. 今後の課題・展望

本研究の課題は、キャリアパスポートにおける明確な記述の変化が見られなかったことである。自己の姿をメタ的に振り返る学級活動は、確かに生徒に色々なことを気付かせ、これからを考えさせるきっかけとなった。しかし、それが直接キャリアパスポートに反映されたかどうかを検証することができなかった。原因とすると、一つは、振り返る動画の素材が「数学の授業」に限られていたことだと考える。今後は、例えば他の教科や、学校生活、行事、部活動での姿を振り返る素材としていくことで、より自己を多面的に理解することができるようになると思う。今後は、様々な教育活動で360°カメラを用いて撮影し、より有効な振り返る方法を考え、キャリアパスポートに活かせるような取り組みを考えていきたい。

7. おわりに

本研究は、紺谷正樹先生（群馬大学）にスタート時のご助言を賜り、はじめられたものです。また、学級活動の実践は、鈴木豪先生（群馬大学）、立見康彦先生（群馬大学）、佐藤浩一先生（群馬大学）のご助言をいただき、よりよいものにすることができました。この場を借りて感謝申し上げます。

8. 参考文献

・秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下郡啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局教育課程課（2020a）. Student Agency for 2030 仮訳 2030年に向けた生徒エージェンシー <https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-lea>

rning/learning/student-agency/OECD_STUDENT_AGENCY_FOR_2030_Concept_note_Japanese.pdf<2022.6.8 閲覧>

- ・秋田喜代美・安彦忠彦・太田環・岸学・木村優・小村俊平・坂本篤史・下郡啓夫・下島泰子・柄本健太郎・時任隼平・奈須正裕・長谷川友香・花井渉・松尾直博・三河内彰子・無藤隆・文部科学省初等中等教育局教育課程課 (2020b). OECD Learning Compass 2030 仮訳 OECD ラーニング・コンパス (学びの羅針盤) 2030 https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf<2023.2.28 閲覧>
- ・伊藤崇達 (2016). 序章 児童生徒の学びを支える指導 自己調整研究会 (監修), 岡田涼・中谷素之・伊藤崇達・塚野州一 (編著) 自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術 北大路書房 pp.1-6
- ・伊藤崇達 (2017). 学習の自己調整, 共調整, 社会的に共有された調整と自律的動機付けの連続体との関係 京都教育大学教育実践研究紀要, 17, 169-177.
- ・白井俊 (2020). OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー、資質・能力とカリキュラムー ミネルヴァ書房
- ・中田正弘 (2020). 【コラム】学びを自己調整する能力を育てる中田正弘 (編) ポジティブ&リフレクティブな子どもを育てる授業づくり 「学びに向かう力」を発揮し、協働的に学ぶエデュスクラム 学事出版 pp.29-31.
- ・文部科学省 (2017). 中学校学習指導要領解説 総則編 東山 書房
- ・文部科学省 (2018). OECD Education 2030 プロジェクトについて https://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf <2022.7.13 閲覧>
- ・文部科学省 (2022). 生徒指導提要 東洋館出版社
- ・OECD (2019). The OECD Learning Compass 2030 <https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/> <2022.7.13 閲覧>